## 康玲子『私には浅田先生がいた』とその時代

飛田雄一



本書は在日女性文学協会主催「賞・地に船をこげ」第一回受賞作品が単行本として発刊されたものである。康玲子さんは一九五六年大阪生まれの在日朝鮮人。父が一世、母が二世なので、

康さんは自身を二・五世と表現している。 時代は一九七〇年代、康さんの長田高校 (神戸市)時代の三年間と自宅での一年間 の浪人生活を綴ったものだ。一九六〇年代 の終わりのころ、大学では全共闘運動が激 しく闘われていた時期だが、兵庫県下の高 校では未解放部落出身生徒や在日朝鮮人 生徒が中心となった「一斉糾弾闘争」がい くつかの高校で展開されていた。康さんが 高校に在学した一九七二年からの三年間 は、その糾弾闘争の影響が残っていた時代 だ。

むくげの会が作られたのが1971年1月。この一斉糾弾闘争の最中であったとも言える。もともと「ベ平連神戸」有志の勉強会であった「差別抑圧研究会」が1970年秋に朝鮮問題を中心課題とするためにこの研究会が発展的に解消してできたのがむくげの会なのである。

会の勉強会でも、たびたびこの糾弾闘争 が話題になっている。

本書で康さんが紹介しているパンフレットに兵庫県立神戸商業高等学校生徒会発行の『先公よ、しかりさらせ』がある。康さんももう一度読んで見たいと書いてあるこのパンフレットを友人にさがしてもらった。そのパンフレットがこれだ。B5版、92頁のタイプ印刷だ。「おわりに」

には、「これは印刷も製本もすべて我々の手によるものだ」とある。 以前、ゲストディに来 ていただいた朴貞愛さ んの文章も掲載されている。



当時、単行本として発行されたものがい くつか私の手元に残っている。その表紙だ けだが紹介してみたい。



福地幸造・西田秀秋編『在 日朝鮮青年の証言』(一九七 〇年四月、)三省堂新書

兵庫県立湊川高校教師 集団『壁に挑む教師た ち』( 一九七二年四月、 三省堂新書)





兵庫県立尼崎工業高校 教師集団『教師を焼く 炎』(一九七三年三月、 三省堂新書)



兵庫解放教育研究会編『はるかなる波濤 在日朝鮮人 生徒の再生にかけて』(一 九七五年九月、明治図書)

私は一九五〇年生まれなので、康さんと 高校は異なるが作者の六年先輩というこ とになる。作品のなかにでてくる康さんが 参加した神戸学生青年センターでの朴慶 植先生講演会も当時まだセンターの正職 員ではなかったが主催者の側にいた。また 同じく作品に登場するむくげの会の北朝 鮮映画「血の海」上映会にもそのメンバー として関わっている。このような意味で、 この作品に私も「同時代」を共有している。

康さんが当時書いていた日記も引用しながらその時代の彼女が在日朝鮮人高校生としての苦悩を、抑えたタッチであるが赤裸々に表現した作品である。先に紹介した当時の本に生徒たちの作文が多く収録されているが、当時を振り返って当事者が書いた作品として貴重なものだと言える。

長田高校に入学して担任となったのが 「浅田先生」で、二年生のときにも担任となっている。幼いときに事故で片足を失い 松葉杖生活をする国語の先生だ。表題のり 本書の大きなテーマだ。在日朝鮮人である ことを隠して「谷山玲子」として通学する 彼女が「本名宣言」をする過程とその後 ので、必然的に自身が朝鮮人である って、必然的に自身が朝鮮人である って、必然的に自身が朝鮮人である ってとが本名宣言となる。在日朝鮮人 るもので、必然的に自身が朝鮮人である 質に対する偏見は今なお日本社会に根 く残っており、本名宣言は当時も今も 朝鮮人にとって大きな問題である。

最近、日本の学校に通うベトナム人生徒がいじめにあい日本名に変えてほしいと 親に訴えたという話を聞いて、日本社会は 近年「多文化共生社会をめざして」と言わ れているのに、在日朝鮮人に同化圧力がかかっているようにベトナム人にもそのような圧力がかかっているのに暗澹たる思いにかられる。

本名宣言で話し合いを幾度も繰り返した同級生のことを「口を開くと人を傷つけ、自分も傷つく、 私もしんどかったが、彼女達だってしんどかっただろう」と、今の康さんは振り返っている。その当時大きな悩みを抱えながら本名宣言をした彼女の支えになっていたのが浅田先生で、浪人生活のときもまたその後も亡くなられるまで康さんには「浅田先生がいた」のである。

浅田先生はある時クラスで「人間が生きる上で、一番大切なこと、一番の目的は、やはり、しあわせになることだ」と言われたが、康さんは新鮮か気持ちでこの言葉を聞き「しあわせになりたい、って思っていいんだ」と初めて教えられた気がしたという。当時の浅田先生への手紙に次のような一文がある。

「いつの日か、きっと朝鮮人であることをよかったと言えるようになるために、あたしは朝鮮のコトバや文化を勉強したいと思います。そしてなにより大切なのは、私自身がしあわせになることです。」

康さんは、いま小学校で非常勤講師をしながら、研修会や人権学習会で講演することがあるという。当時であれば「私には浅田先生しかいない」としか書けなかったという康さんが、その後三十数年の人生を歩みをへて、いまは「浅田先生がいた」と肯定的に書けるようになったのである。今も悩みを抱えながら暮らしている若い日本の友人に特にの世代の方々に、あるいは、彼/彼女ら日々接している若い日本の友人に特にしていただきたいと思う一冊だ。(この文は飛田が『さんいち』復刊2号、2008年5月に書いた書評を一部改訂したものです。)

【康玲子『私には浅田先生がいた』、三一書房、四六版、180頁、定価1238円+税】